時評

「震災詠」の問うもの

谷岡亜紀

これを書いている時点で東北（東日本）大震災から一年三か月が経った。その間、短歌の周辺でもさまざまな論議があった。目を引くのは長谷川櫂『震災歌集』と和合亮一詩集『詩の礫』への批判である。結社誌の時評などでも様々に展開されたが、代表的なものは「短歌往来」1月号の対談「大震災と詩歌を語る」と、角川「短歌」3月号の二つの座談会「3・11以後、歌人たちは何を考えてきたか」である。ここでは前者を取り上げる。

「短歌往来」の特集「大震災と詩歌を語る」は、評論家で前内閣官房参与の松本健一と「塔」の松村正直の対談である。松本は『震災歌集』について「ここにうたわれている短歌はこれは歌として自立してないよと（歌人は）何故声を上げないのか」と述べ、和合の詩に対しては「極端に言えば、このドキュメントはわれわれがたくさん目にしている新聞の写真とか、見出しの大きな字だけで済んじゃうのと同じようなもんですね」と言う。厳しい言葉だが、語られていることは重い。しかも、圧倒的な現実を前に表現をどう「自立」させるか、新聞の見出しやマスコミの言葉をなぞるだけの表現をどう凌駕してゆくか、という命題は『震災歌集』『詩の礫』だけの問題ではなく、歌を作る我々一人一人に直接的に突き刺さる刃である。また松村は『震災歌集』について、俳人である長谷川櫂が何故俳句ではなく短歌をつくったのかを問い、「長谷川さんの場合は俳句に関してはプロですよね。下手な俳句はつくれない。それに対してご自身も短歌は素人とおっしゃっているように、ある種言い訳が用意されている」と述べる。

長谷川櫂自身は「短歌往来」去年11月号の編集長インタビューで、当初なぜ俳句ではなく短歌だったのかについて幾つか理由を挙げているが、強調するのは、事態の推移や〈我〉の思いを述べるには、七七分の長さが必要だった、ということである。（ちなみに「〈我〉の思い」の表出の違いは、俳句と短歌を分ける分岐点だと言えるが、ここでは触れない）。事態の推移や〈我〉の思いを縷々述べるには七七分の長さが必要。これは多くが感じていることだろう。やや乱暴に言えば、俳句の長さ（短さ）にはドキュメントを入れる余白がない。震災当初、新聞の俳壇ではなく歌壇にいち早く「震災詠」が集中したのはそのためだろう。ただ、私は昔長谷川さんにお宅でお酒をごちそうになった恩義があるので言うのだが、「素人」発言も含めて、長谷川さんはやや正直過ぎた。そのことを私は気の毒に思っている。むしろ本当に問われなくてはならないのは、われわれ「歌人」の側なのだ。

圧倒的な現実の暴力性を前に、思考を停止せず、「公式発表」を鵜呑みにせず、いかに自分の頭で考えを進めるか。画面が繰り返す映像に相乗りせず、総論・一般論に陥らず、いかに細部に想像力を届かせるか。我々の時代の現実に、当事者としてどのような〈現場〉で参加できるか。これは今回の震災だけの問題ではない。松本健一の義憤が本当に問うているのは、俳人長谷川櫂の短歌ではなく、歌に直接関わる私自身の覚悟だと気付くのである。